

## 16 華岡門難波抱節らの蒙汗薬（麻薬）

### の使用について

中山 沃

難波抱節（二七九一—一八五九）は吉益南涯、賀川蘭齋、華岡青洲、弟鹿城に学び、未刊の名著『胎産新書』を著述し、緒方洪庵から牛痘苗を譲り受け、備前地方に種痘を普及させた大医である。その他外科に関する著書として瘡瘍新書、乳岩弁が知られている。しかし、労働科学研究所の温知堂文庫目録の中に記載されていない。ただ門人の手で描かれた『瘡瘍新書図』一冊のみが残されている。

抱節の長男経直（一八一八—一八八四）も南涯、青洲、蘭齋、藤沢東咳、亀井昭陽の順に学び、最後に豊後日出の帆足万里に学び、弘化二年（一八四五）帰国した。この時、帆足塾で書写した邱洪川の『引痘略』を持ち帰った。この写本により抱節は牛痘接種の優れていることを知っ

て、洪庵に分苗を請うたのである。帆足万里の塾への遊学の途中、大洲の青洲の門人鎌田玄台の名声を聞き、玄台を訪問するため四国に渡ったが、松山で一医師から玄台の死去したことを知らされ落胆し、船で瀬戸内海を渡り、防・長州を経て帆足塾に向かった。しかし後日、帆足塾を訪れた大洲の人から玄台が健在であることを知らされた。経直の頸部に腫瘍ができたとき、玄台の治療を受けようと決意したが、かなり重篤であったので万里は帰国を勧めたため、面接を果たすことができなかった。

嘉永四年（一八五二）玄台は自己の経験症例と手術術式をまとめ、『外科起廃』一〇巻を刊行したが、安政元年（一八五四）死去した。経直はこのことを郷里で知った。玄台に会うという宿志は消えてしまったが『外科起廃』を読み、師や父抱節から教えられたことや自らの経験した症例や手術例を記し、玄台の『外科起廃』に記載されているものと比較評論した一書『外科小補』三巻を著述した。自序の末尾に、「時安政四年丁巳仲冬、備前金川難波経直撰于岡山橋居忍和斉」と記されている。しかし刊行されなかった。

この『外科小補』上巻の「起廃甲之巻、麻沸湯条評」

に、「麻沸」の字は『後漢書華陀伝』に見え、「麻沸湯」は『傷寒論大黃黃連瀉心湯条』に見えるが如く、湯沸の時、泛沫（浮かぶ泡）麻子の如きを謂う也、按ずるに「麻沸湯論」の四字は名義適せず、宜しく改め「用麻藥論」の四字に作るべし、「麻藥」の二字は徐春甫の「古今医統」に見ゆ、又「蒙汗藥」は「忘形酒之目」にあり、皆酒を用い和して服す、以て其の酔迷に資す、今水煎之を用う、散服或いは吐き反つて其の効を少なくす、西医或いは外敷方に用い、之を麻す、と記している。また同書下巻の「麻藥、一名蒙汗藥」の項では、「蒙汗は張介石の資蒙医径銛骨門の載す、蒙汗藥は少なく服すれば、すなわち痛みを止む、多く服すれば汗を蒙むる」と記している。難波抱節一門の麻藥の一般用法及び乳岩切除時の使用については拙著「備前蘭学の開祖児玉順蔵と澳蘭折衷医難波抱節」（本誌三八卷一〇五ページ）を参照されたい。

青洲は抱節らにも麻藥の処方については秘密にし、伝授しなかつたので、抱節は弟子とともに自らも試みて、その処方を選んだ。これによれば、曼陀羅華一錢二歩、当帰、川芎、天南星、白芷各二分で、各々を細かく碎き合わせて水三升で煮て、一升到煮詰める。春夏は二時間

で、秋冬は三時間で麻藥湯ができあがる。火の加減がやや烈しいと湯は速成されるが、其の氣は慄悍で用いるのに適しない。青洲の処方と違ふところは、烏頭を除いたことである。經直が帆足塾に在塾中、烏頭入りの麻藥を用いて患者の袖手疔（包莖）の手術をした。この時、烏頭の毒は慄悍なので、除いた方が良いと考え、これを師万里に諮問したところ、賛成したので、以後烏頭を除き、繰り返し試み自信をえた。この処方では、麻倒和緩、醒後、神氣速やかに復す、と述べ、毎年十数人を治療し、この五十年間、其の功奏せざる者無し、と記している。また經直著『温古知新医学範（明治九年刊）』では、「歴使歴驗、殆ど七十余年、百拳百全、一失有る無し」と述べ、更に最近用いられているクロロホルムはすぐ醒め、頻回に嗅がせなければならず、副作用があり危険であるので、自分らの用いている麻藥がより優れていることを力説している。

難波一門では麻藥を乳岩以外に、脱疽、尿道漏孔の頑肉切除、陰莖切断、粉瘤切除などに使用している。これらについて報告する。

（兵庫県西宮市）